

国語 I 「物と心」授業報告

古賀克子

一、はじめに

(1) 授業期間とその対象

昭和五十八年五月三十日(月)・三十一日(火)・六月四日(土)

・六日(月)の計四時間

福岡県立三池高等学校一年三組

四十五名(男子二十五・女子二十)

(2) 教材

高等学校国語 I (学校図書)

小説(一)「物と心」(小川国夫)

(3) 生徒観と授業目標

高校生となって約二箇月。中間審査も終え、一学期中では最も落ち着いて学習できる時期である。国語 I の現代的な教材としては、序詩「地下水のように」・随想「野の花」といった入門教材を経て短篇小説を学習することになった。

一年三組は、問いに対して、誰もがよく考えて答えようとし、他者の答えに耳を傾け、よい意見が出ると拍手が出て、教室が一

つになって湧くクラスである。

中学時代の小説教材の読解・鑑賞の学習を経て、掌編ながら、やや高度な作品の簡潔な文章を精読し、主人公浩の心のひだを読みとることによって、ことばの感性を豊かにすること。学習者自身の内面を省みて、自己を確立する一助となるようにと考えて、次の指導目標を定めた。

- 1、作品を正確に読み、前時まで学習した「幸福」(安岡章太郎)と比較しつつ、大意と構成を把握させる。
- 2、文章を精読して、物によって解発された浩の心が、兄宗一とのかわりによって微妙に変化してゆくところを汲みとらせる。
- 3、事物(小刀)に対して、浩と宗一とが、それぞれどのように対処しているか整理させて、「物と心」の主題を考えさせる。
- 4、まとめとして、作者について推察させる。

第三時	第二時	第一時
◎作品の内容を理解させる		◎作品の全体像をつかませる
<p>① 物（小刀）に対して、浩と宗一が、それぞれどのように対しているか整理し、対比してみる。</p> <p>② 「物と心」と題したこの作品の主題をまとめよ。</p>	<p>① 第一時の答案を返却、以後随時利用して発表の手がかりにさせる。</p> <p>② 一段・二段の表現に即して、浩の心の変化を把握させる。</p> <p>③ 三段・四段の表現に即して、浩の心の変化を把握させる。</p>	<p>① 全文通読。……一読しての表現上の特徴、その他の気付きを発表させる。</p> <p>② 再読。作品のあらすじを把握せ、四段落（起承転結）の構成になっていることを確認させる。</p> <p>③ 各人の読みを深めるための問い（注1）を出し、西洋紙一枚にまとめ、放課後提出させる。</p>

<p>問(一) 浩は、兄の宗一に対する競争意識を強く持っているが、そのほかに、兄に対して、どんな意識がはたらいているか。〈学習A一V〉</p>	<p>問(二) 浩はなぜ、自分の小刀で、てのひらを切ったのか。</p>	<p>問(三) 宗一はどのような少年であると考えられるか。</p>	<p>問(四) P36「これが僕の気持ちだ。」について分りやすく説明せよ。〈学習A二V〉</p>	<p>問(五) P36、結びの一文における浩の気持ちはどのようなものか。〈学習A二V〉</p>	<p>問(六) ①「物と心」という題名について思う所を書け。</p> <p>② 作者について思うところを記せ。</p>
---	-------------------------------------	-----------------------------------	--	---	---

注1、第一時に用いた問い（※問四までは、指導書に折り込まれたものである。）

第四時
◎主題を把握させ、作者にたいして推察させる
<p>③ 「物と心」を著した作者について推察させる。まとめとして、この作品が「生のさ中に」と題して昭和四十一年に発表された半自伝的な二十三の短編の一つであること、そして単なる回想でなく現在の自分を掘り下げていく手段として幼い頃のできごとを記したことを補足紹介する。</p>

資料 1

出席番号	生徒名	羨嫉 望妬	劣等感 ひげめ	甘え 依頼心	あこがれ 尊敬	その他	
1	池田(男)	○		○			2
2	大西	○	○		○		3
3	大紙				○		1
4	木原				○		1
5	木下						0
6	黒木		○				1
7	久原			○			1
8	境		○		○		2
9	末吉	○	○				2
10	角	○		○	○		3
11	園田	○					1
12	田中	○	○				2
13	塚崎	○			○		2
14	辻		○		○		2
15	徳永	○		○			2
16	中満	○	○				2
17	林		○				1
18	馬場	○		○			2
19	堀川			○			1
20	松尾				○		1
21	宮本			○			1
22	光永		○	○			2
23	森					○	(1)
24	吉富				○		1
25	渡辺		○				1
31	岩崎(女)				○		1
32	一瀬	○			○		2
33	今村	○			○		2
34	樺	○	○	○			3
35	後藤			○			1
36	境	○			○		2
37	坂梨			○			1
38	佐田			○	○	○	2(1)
39	高田	○		○			2
40	多田	○	○				2
41	田中	○	○		○		3
42	徳友	○	○		○		2
43	友中	○	○				2
44	中園	○	○				2
45	永江				○		1
46	原田	○			○		2
47	福松		○		○		2
48	山井		○				1
49	山下	○		○	○	○	3(1)
50	吉村					○	1
		22人	19人	13人	19人	3人	

問(一) 浩は、兄の宗一に対する競争意識を強く持っているが、そのほか兄に対して、どんな意識がはたらいているか。

(学習)

前記、第一時の六問のうち問(一)についての答案を整理してみると資料1のようになった。
浩の意識は、兄宗一に対して、「羨望と劣等感」の方向と、「甘えとあこがれ」の方向とにまとめられるかと思う。四十四名のうち、

この両面を拾っている者は十八名で約三分の一強。その他の三名は、「まげん気・嘘をついたことへの自己嫌悪・自己の思いについての思い」などと、問いに対して、かみあう答えを出すことを自覚していない。

資料 2 浩はなぜ、自分の小刀で、てのひらを切ったのか。

	(男子)	(女子)
① 兄に気を使ったあまり、誤って切った。	黒木	
② あせりから { a 兄の小刀より、よく切れるようにしようとして。 b 兄と どんどん差がついていく感じがして。 c 時間が長く感じられて。	辻 松尾・森	樺・後藤・佐田 岩崎・原田
③ 兄の小刀がよく研げるのを見て、ねたましく思っ		多田隈
④ 兄を羨む気持ちと、その場の雰囲気を感じ切ろうとして。	角	福原
⑤ 兄が小刀を研ぐのをやめさせたから。	境	今村・坂梨・田中
⑥ 兄の気持ちを小刀を研ぐことから、そらせなくな		佐田・友添
⑦ 自分の小刀もこんなに切れると見せたから。	池田・紙田・久原・宮本	
⑧ 兄の気を引くため。	大西・角・國田・田中・ 塚崎・中満・林・馬場	岩崎・一瀬・後藤・坂梨 中園
⑨ 兄の気を引いて、兄にかまってもらいたから。	木原・徳永・光永	永江
⑩ 自分では、どうしても研げなくて、 { a 兄を頼ろうとして。 b 兄が研いでくれると考えて。 c 自分の小刀を宗一のと変えた かったから。	堀川・渡辺 塚崎	吉村 境・高田・徳田・福原・松井

資料3 宗一はどんな少年であると考えられるか。

	(男子)	(女子)
① わがままで 負けすぎらい。 ② 気が弱い。	塚崎	板梨
③ 黙々と努力する少年。	田中	境・友添・福原
④ 真面目。 真面目でしっかり者。 真面目で弟思いの少年。	園田 徳永	今村
⑤ 熱心・熱中 一つのこと集中してしっかりしている。	吉富・末吉・林 角・辻・馬場	永江 今村・樺・田中
⑥ 一見静かで落ち着いているが、心の中には強いものがある。		中国
⑦ 器用で周到。 器用で、寛大。よき兄であり優しい。 器用で浩よりしっかりしている。弟思いであり弟をリードする力がある。	大西・中溝 紙田 黒木	
⑧ 弟思い。 弟思いで心の広い少年で、優しい思いやりがある。	角・辻・堀川 池田・寛・久原・角・田中 宮本・光永・渡辺	一瀬・後藤・佐田・高田 多田隈・徳田・友添・山下 吉村・田中・原田
⑨ 何でもよくできる長男タイプ。		福原
⑩ いつも冷静で兄さんらしい。	森	
⑪ 頼りになる少年。	松尾	佐田
⑫ 浩よりずっと大人。		樺・松井

資料2・3・4についても、短時間によく考え抜いて答えた者も
 ければ、一語の単語で答えたり、あっさり「分りません」と答えて
 る者もあり、「物と心」という作品は、一応とりつきやすい小品

持った作品と言えよう。
 ではあるが、高校一年生としては授業の中で充分読み深める価値を
 問田結びの一文における浩の気持ちはどんなものか。については

資料4 「これが僕の気持ちだ。」について、分りやすく説明せよ。

	(男子)	(女子)
① よく分りません。	森	今村
② どこにぶつけようもない、いらついた気持ち。	園田・田中	山下
③ 水に血が混ってぼんやりしている様子。 → そのようにぼんやりした気持ち。	大西・黒木	徳田・友添・吉村
④ 水が流れ出ているように、僕の心の中から何か流れ出ているもう一つ しまりがない。	木原・境・辻・馬場	
⑤ 水の中に血がゆらゆらと流れるのを見て、自分の心もこの血の流れのよ うにゆらゆらと落ち着きを持たない。かなり動揺した気持ち。	久原・角・林・松尾 吉野	岩崎・一瀬・境・坂梨
⑥ 自分にはまだ兄のようになりしなかった。流れる血のようになり 着していない。	池田・田中・堀川	佐田・松井
⑦ 兄のようになりしなかった。気持ちになれないふいふいなきさ。	末吉	福原
⑧ 形の定まらないうきいとは言えない気持ち。	紙田	境・原田
⑨ 魚屋の流し場の血のように、きれいな水のような兄の心に。血に見立て た自分の汚い心が混って流れてゆくような気持ち。	徳永・中溝・渡辺	
⑩ 心が濁っている自分を反省している。	宮本	
⑪ 整然とした兄の態度をみて、自分がどうしようもなくなくなったこと。	園田	

資料5 「物と心」という題名について思うところを書け。

<p>① コノヤロ……分らない／ 分らない。 思いません。</p> <p>② 「物」は不要で、「自分の心」などにすればよいと思う。</p> <p>③ 「物」とはナイフ、「心」とは浩の、兄をうらやむ気持ち。 「物」……小刀「心」……浩の気持ち。 「物」である小刀を通して、浩の微妙な心の動きが、はっきりと表してある。</p> <p>小刀という「物」を通して、浩の兄宗一に対する心の移り変りを描いたところ。(いい題だと思った。—光永)</p> <p>④ 「物」にもその人の「心」があらわれる意。</p> <p>⑤ 何につけても、「心」がよごれたり、集中できなければそれが、「物」にあらわれる意か？</p> <p>⑥ 人の「心」は「物」で左右されるもの。</p> <p>⑦ 何気ない、そのへんの「物」でも、それが人とかかわれば、ハッと「心」に突き刺さるよう何かを気付かせることがあるんだ。</p> <p>⑧ 「物」一つについても人間は、いろいろな感情を持ち、いろいろな経験をする。</p> <p>⑨ 「物」とは小刀のことで、小刀の研ぎ方に宗一と浩、二人の「心」が表われてくるからつけたと思う。</p>	<p>(男子)</p> <p>木原 徳永 中満 國田 末吉 塚崎 末吉・堀川・松尾</p> <p>境・辻・光永</p> <p>原田 山下 高田 多田 隈</p> <p>紙田 黒木</p>	<p>(女子)</p>
---	---	-------------

誰も解答していなかった。精読の流れの中ずもう一度問うことな要るだろう。これについては、授業中に、各自のノートに解釈を書かせてみた。

問④については、左記のような答えが出てくる。⑨については授業展開の中ですべて折り込んでいる。

三学習指導の展開(四時間配当)

◎第一時

指導目標

◎作品の全体像を把ませる。

◎表現の特徴に気付かせる。

①

指名により全文通読。
表現その他についての気付き
感想を発表させる。

板書

- a (前回まで学習した)「幸福」も短編だが、これは、非常に短い作品である。→「掌編小説」について簡単に説明する。「幸福」も「物と心」も、主人公が少年や青年期の入り口である点を、後日語る形が似ている。
- b 文末部が、ほとんど過去形になっている。
「幸福」もそうだが、こまかい心理描写ができているのと合わせて考えると、これは、作者自身に浩と似た経験があるのではないか。……(同感の声あり)七・八名。
- c 会話文の引用形式が、カギ括弧でなく、会話文のはじめにダッシュを使っている。作者は一風変わった人のように思う。それと、会話にだけ方言をつかっている。→小説にどんな効果をもたらしているか発問。
- d 兄の宗一と弟の浩の二人の行動や心理状態が、対照的に描かれている。……(拍手あり)
- e 短かい作品で、はっきりしたことは描かれているようなのに何か分りにくい所がある。→次時から表現に即して、精読して、内容を解明して行くことにしようとして述べて結ぶ。

②

指名により再読。

作品の大筋をまとめさせ、
四段落構成になっていることを確認させる。

◎「物と心」という対比的な題名でも暗示されているように、二本の小刀という「物」をめぐっての二人の少年の「心」を主人公である浩の目と心を通して描いたものである。

板書

○二人についての叙述のうち、文末部を比べてみる。
 宗一については、動作を表す述語ばかりが五つ。
 浩については、心情を表す述語が、きわめて多い。
 作者の力点のおきどころは浩の内面であらう。

⑧ 注1の六問に対する答案を各自放課後までに提出するように指示。
 残りの五分ほどから個人作業とする。 ↓ (45名中44名提出)

(口頭で発問し、用紙にメモさせる。)

◎第二時 (各段ごとに文章を模造紙に整理して示し、この整理した文を見ながら浩の内面を推察していった。)
 指導目標 表現に即して、人物の心の動きを把握させ、内容を理解させる。

一段のポイントまとめ

掲示した文章

推察した浩の内面

解説、ことばのピックアップ

◎人物・場所・行動について拾う。

1. 兄の宗一といっしょに

。「漁る」の意味 (鋸び)

浩は
「駅の貨車積みのホームへ行き
鉄のスクラップの山をあさって、
一本ずつ古い小刀を拾った。」

さびきっていたので

二人
家へ戻って、

砥石を並べて
我を忘れて研いだ。

「小刀を研ぐ
仕事に没頭し無我の境」

3. 結果
「浩の小刀はよく光り……。
宗一の小刀はその面の縁だけが光っていて、……。」

「仕事の結果の違い
を目にした浩」

二段のポイントまとめ

1. 浩は

「自分は丸刃にしてしまったが
兄さんは平らに研いだ、
と思った。」

失敗の意識、自己の
技術の未熟さに対し
て兄の技術のたしか
さを

(錆び)
「さびき」

動詞連用形について、

「……し尽くす」

「とことんまで……する」の意。

「弱りきる。読みきる。困りきる」

スクラップ

〔Scrap
断片〕

① 新聞・雑誌などの切抜き。

② くず鉄。

対比されているものは

二人の小刀(物)

から

自分(浩)と兄(宗一)という

人間の対比へ

2.

浩は

「自分が時間を浪費して、

しかも

取り返しがつかないことをしてしまつたように思い、

「周到だつた兄をうらやんだ。

〔自己の失敗に対して兄への羨望の気持ち〕

。「時間を浪費して」↓かなり長い時間研いでいた。

。「丸刃」・「平らに研ぐ」

。1における二人の小刀の図解をさせる。↓小刀そのものが描けない者多し。

3.

浩は、心の動揺を隠そうとして、

黙つてまた砥石に向かつた。

〔兄と自分の小刀を研ぐしつづもという技術の差に動揺兄に対する競争心あり〕

。「周到」

① 辞書の意味

② この場面では、兄のどういう点を言っているのか。

4.

横にいる宗一が意識されてならなかつた。

彼が横にいるだけで、

浩は牽制されてしまひ

自然と負けていくように思えた。

〔兄さんにはかなわないという思い〕

〔単に錆びを落し、きれいにするのみでなく、小刀の切れ味を考慮に入れて研ぐ〕

。「意識されてならなかつた」

。「思えた。」

← 自然にそう思われた。

。「牽制

「牽制球」

6.

浩は並んで研いだ。

宗一がどんなふうに研ぐか気になつたからだ。

しかし

〔兄に対する競争心を抱き続けてい〕

7.

◎第三時

指導目標

表現に即して人物の心の動きを把えさせ、内容を理解させる。

三段のポイントまとめ

1. 浩は自分の小刀でこのひらを切って宗一に見せるようにした。

兄の姿からうける圧迫感
自己の小刀を研ぐ気力の注
消失、自己の方に兄の注
意をひきつけたい気持ち

「見せるようにした」

2. 宗一はそれに気づき、目を上げて浩を見た。

意識的なきき

8. ◎◎ 宗一はやっていることにふけていた。

9. ◎◎ 浩は自分もふけているように見せかけた。

10. 浩には時間が長く感じられた。

11. 自分が人をこんな思いにさせることがあるのだろうか、と彼は思った。

物に心を集中して小刀を
研ぐ兄の姿、平らに研げ
た小刀から浩のうけた圧
倒されるような気持ち
屈折した気持ち

。「こんな思い」

。自己の内面把握

宗一が小刀を研ぐことに没頭しているの
に、浩は没頭できないから。

物の対比から
「人間（心）」の対比へ

3. 浩は自分から宗一の視線の前へ出ていった気がした。

〔自己の内面を見ず、かされた気持ち〕

4. 宗一をだました自信はなかった。

〔自己の行為を悪と感ずる罪の意識〕

5. 宗一はといでいた小刀を浩に差し出して、

—これをやらあ、と言った。

↑ 一目で弟の状況を理解し、浩の屈折した心を包みこむような言動をする兄

6. —けがはどうしっか、と浩はきいた。

→

7. 彼はもう嘘の後始末の仕方を宗一に求めている

気持ちになっていた。

〔兄に対する競争心を失い兄を頼る心〕

5. —けがか、ポンプで洗って、手ぬぐいでおさえていよ、

と宗一は言った。

6. —……。

〔兄の指示に心服している浩〕

7. —おまえんのも、痛くても我慢して待っていよ。

↑ 兄のいたわりの一言

四段のポイントまとめ

1. 浩はポンプを片手で押して、傷に水をかけた。

○ 「魚屋の流し場」

2. 血は

← 次から次へと出てきて、

水中に混じってコンクリートの枠の中へ落ち、

彼に魚屋の流し場を思わせた。

〔自分の意識的な動作に對して、なんの疑いも示さない宗一に對するやましさ〕

3.

彼は

その流れぐあいを見て、

これがぼくの気持ちだ

どうしたら兄さんのようにひきしまった気持ちに

なれるだろう、と思った。

いつまでも定まらず揺れ動く心。

他者にわずらわされることなく、自己の行為に専念できる集中力のある心。

4.

宗一は巧みに力をこめて研いでいた。

浩の苦境を苦もなく救ってくれる兄、小刀を研ぐことに集中して、みごとに研げる兄に対する敬服

←

5.

浩はその砥石が、規則正しく前後に揺れているのを見守っていた。

〔宗一の小刀を研ぐ作業のスムーズな進行、見守る浩に伝わってくる快いリズム〕

宗一の心と小刀を研いでいる砥石という物とが一体になっている状態。

6.

すべてが宗一に調子を合わせて進んでいた。

物（小刀）と一体となっている宗一の持つ充実感と

〔それを見ている浩のどのような心情が示されているか？〕

この一文について、ノートに各自の解釈を書かせて、指名により発表させる。

（板書して整理）

a 言いかえれば宗一を中心に地球が回っているとでも言うような感じだろうと思います。何というか宗一にすべてがうま

く噛み合っているような感じだと思えますが、よく分りません。(中満)

b 宗一が黙々と規則正しく小刀を研いでいる姿を見て、浩は、兄が確実に物事をこなしていくのを感じ、小刀が研がれていく様を見て、宗一が大人になっていくのを感じた時、まわりのすべてのものが兄に調子を合わせていくように思えた。そして、浩自身はとり残されたように感じている。(福原)

c 何の邪念もなく研いでいる宗一は小刀を研ぐことに真剣に心をうちこんでいるので、小刀は宗一の思いのままに研がれてゆく。(浩にはそのように見える。そんな兄の姿に対して、浩自身は自分の心も小刀を研ぐ技術も未熟で、みじめに思えてくるのではないか。(坂梨)

※(一)内は教師の補足

d ※(三段における兄宗一の浩に対するやさしい言動、四段の「どうしたら兄さんのようにひきしまった気持ちになれるだろう」と考えるところ、浩の小刀をも、確実に処置して、研ぎ上げていく兄の姿などから考えると)ここでは、浩の兄への劣等感がうすれて、兄への尊敬の気持ちに変わり、浩の目も心も含めて、小刀や砥石も、水もすべてが、宗一を中心に向いているようであるという意味。(二類)

e 浩は宗一の手と小刀と砥石しか見えず、あこがれの気持ちで宗一を見ている。無邪気に兄を見つめているので、自分も含めてすべてが兄に調子を合わせて 進んでいるように感じた。(岩崎)

f 小刀という物を研ぐこと、そして兄宗一に対して常に揺れ動く浩の細かい心が宗一の広くてやさしい心による行動、ことばの一つ一つによって明るい安定の方に動いている様子を作者はこの一文で示している。(松尾)

g 「すべて」というのは、浩の気持ちも、砥石と小刀がまじわって揺れているリズムもという意味で、「宗一に調子を合わせて進んでいた」というのは、宗一の澄んだ集中力のある心にすべてのものが親しんでいるのだと思う。(山下)

※ 右の浩だけがとり残されているように感じるabcと、浩を含めて、すべてが宗一に調子を合わせて進んでいると描いたところdefgとに受け取り方が二分されたので、四十五名全員にどちらの意見か挙手で答えさせた結果、

前者の意見二十名

後者の意見二十五名

とわずかに後者が多かった。

教室全体の意見も二分された形である。

← 学習者同士で意見をいい合っているので、著者小川国夫と、紅野敏郎（早稲田大学教授）との対談（昭和五十七年三月十八日）の一部（注2）を、「古典と現代47（明治書院）」から引用紹介して、後者の方で解釈しておきたいとしくった。

注2

小川 人間の原型と言いますか、その逃れられない一つの型として、人間は必ず、物とかかわって生きなければならぬということがありますが、僕にはこの事実が気にかかるんです。（中略）

小川 そこで人間の原型ということですが、物と人間は離れられない縁があるわけです。そして、人間は物を巧みに使ってみせる人間に対して、尊敬の念を持つと思えます。（中略）優れた考え方ができるといふのと同じように、物を使いこなすこともまた人間の価値だと思えます。

この小編の中でも案外そういうことを言っているようにも今になって思うわけですね。ナイフや砥石を自分の物として……。

紅野 完全に、フルに使いこなすとも言えますか。しかも黙って……。

小川 使いこなす人間に対して、使えない人間はコンプレックスを持つ。

（中略）

紅野 それは負けたという感じですね。同時に負けたと思っても、話の展開の中でやがて静かにいやされていくわけですね。

小川 そうです。

紅野 このいやされ方が慰められたり、病気の場合で言えばカンフル注射を打ったりするといふいやされ方ではなく、ある一瞬の行為やあるワンセリフで静かにいやされていく。

小川 そういう一つの内省ですけれど……。

注3 「注2」のとりあげ方について、浮橋先生から「こは、紅野氏の「それは負けた……同時に負けたと……。」から、無理に片一方に決めるのではなく、浩の孤絶感もやはりあり、そしてまた、兄の言動によって、慰められ、心が安定する面もあるという風に考えた方がよくはないか。」との御助言をうけた。

◎第四時

指導目標

◎主題を把握させる。著者について推察させてみる。

① 浩と宗一の物(小刀)に対し方を比較してまとめる。

砥石に向かった時

浩……小刀のさびを落してきれいにすることしか念頭になかった。↓丸刃に。

兄の小刀と自分の小刀の研げた結果や自分より上手に研ぐ兄にばかり気をとられて、自分の小刀を研ぐことに集中できないでいる。研ぐ技術も未熟である。

宗一……切れるように研ぐことを自覚して研いだ↓平らに。

(集中している)

小刀の研ぎ方を知っていて、技術的に浩よりはるかに上であり、研ぐ行為にふけっている。

② 「物と心」の主題について意見を發表させ・まとめる

a よく分らない。(大西・樺)

b 小刀という物を通しての浩の微妙な心の動き。(末吉・堀川・松尾)

学 習 活 動

板 書

- c. 小刀を通しての浩の兄宗一に対する気持ち。(辻)
- d. 小刀を研ぐことで、自分(浩)と兄(宗一)の心の違いが分り、水に流された血を見て、いっそう自分(浩)の心を見た気がした浩の心。(永江)
- e. ナイフという物の研ぎぐあいを通しての浩の心。劣等感? 罪の意識?(吉村)

まとめ

板書

拾った小刀を研ぎあげるといふ少年の日常の瑣事を通して
少年(浩)の心に起こった兄(宗一)に対する心の動揺

③

「物と心」を著した作者について、推察させてみる。

↑各自のメモを発表させる。

- a. 何を言いたいかよく分りません。(高田)
- b. こればかりはわからない。ただ、作者と浩をダブらせてあるような気がしますけど。(末吉・塚崎・多田隈)
- c. 名前など、全く知らなかった。(大西)
- d. 会話に普通カギ括弧を使うのをダッシュを使うところから一風変わった人だと思うが、あとはあまり知らない。(松尾・吉村)
- e. この作者は、兄弟愛を描くのがうまい。(堀川)
- f. よくこの短い作品の中に言いたいことがまとめられたと思う。(原田)
- g. 洗練された文章を書く人だなあとと思う。(樺)
- h. 浩のひがみやうらやみの心や、兄への尊敬の心が、まるで命を持たない物(小刀や流れる血や・砥石のリズム)にたと

えて描かれている気がする。(田中)

i 作者はきつと、浩と似た経験があるのではないかとそうじゃないと、あんなこまかい心理を書き表せる筈はないと思う。(岩崎・坂梨・徳田)

j 「なにげないどこにでもある兄弟の生活の一場面だが、作者は、短いことばで、リズム的にズバズバと書いている。昭和四十年九月五日「朝日新聞」(一冊の本……小川国夫「アポロンの島」)についての島尾敏雄氏の文章の一部。

注4と同じ鑑賞ができていますので、この部分を紹介した。

私は、作者には、お兄さん、またはお姉さんがいたんだろうと思った。それは浩(弟)の兄に対する気持ちと一緒に、私の幼い時のことを思い出させてくれたから。私は三女です。(永江)

k 大人になりきれない少年の気持ちがよく分る。きつと、こんな経験をした人だと思う。人物の気持ちをあまり説明しないでかえって、読む者が、自分自身の気持ちとして感じられるような文章を書く人だと思った。(福原)

l 重要なことだけを書き抜いて小説にし、自分の考えをまとめることのできる人。(黒木)

④ 「物と心」がどのような意図で著されたものかを紹介して、しめくりとする。

。少年期における弟の兄に対する心の屈折を、「さびた小刀」を研ぐという作業の過程で表現した。

。子が父に対して、友人に対して、或はいつかどこに対して持つ、青少年期特有の劣等感が、日常生活の中で、慰められた出来事を、小刀を研ぐという作業を通して表している。

注4 昭和四十年九月五日「朝日新聞」の記事。

「総体的にそれらの短篇のもつリズムが私のからだにいつまでもある高なりをとどめているのに気づいた。形容を抑制し、場景と登場人物の外面的な動きを即物的に写生し、透明な使い方によることばを、竹をたてかけるぐあいにならべただけなのに、その字と行の

白い空間からかたりかけてくるなにかに、ひきつけられた」(島尾敏雄)

四、反省と課題 (生徒の声をきいて)

1. 学習者の生活の中に「小刀」が縁遠い存在となりつつあると

と。「ポンプ」も同じ

→ (図解できない者が四十五名中、約三分の二いた。)

2. 文章を学習者と一緒に精読することに時間を多く使うために、板書の時間を省略し、文章を段落ごとに模造紙に整理し、浩の心理を色画用紙にまとめて文の下に並べて行ったために、「授業はおもしろかったが、その時々問題を考えるのが、精一杯で、授業の流れをノートする時間がなかった。」(中略) 精読しようとする時に一考すべき事であろう。

3. 第一時に「六つの問いを出して提出させたことは、「次からの授業の流れがある程度察知できたし、いつもより真剣に文章を読む気になってよかった。」(馬場)

→ 普段は予習の指示だけで、めったに提出させないで一斉授業をすることが多いことを反省している。

4. 「物と心」という小説の、教材としての価値を再認識できた。

→ 生徒のメモからと、昨年「物と心」を学習した二年生長君の「先生、あの小説は、印象深いですね。あれは、自分一人の中でも時によって、浩の時だなとか、のってる時には宗一の時だな、なんて思いますよ。」という会話から。

おわりに

この原稿をまとめた際と、昨年五月末の研究授業の際も、貴重な

資料を提供して下さい、折り折りに助言をくださった三池高校の原口武憲先生、昨年八月、光葉会の研究発表会の折りに助言と、はげましのおことはをくださり、かつまた公開授業のプリントをもくださった広島大学の浮橋康彦先生のお二方に心から感謝いたしております。

また、歩みののろい私をいつも支えてくださった浜本純逸・宏子御夫婦にあらためて感謝いたします。

昭和五十九年八月二十日

参考文献

- 1、研究資料現代日本文学第二巻小説・戯曲 II

昭和55年9月25日発行(明治書院)

- 2、新鋭作家叢書——小川国夫集 © 1971

昭和46年12月20日発行(河出書房新社)

- 3、名文 言語生活叢書 中村明著

昭和54年3月30日発行 K K 筑摩書房

- 4、現代の文学 37

昭和53年2月10日 K K 講談社

- 5、島尾敏雄全集第14巻

1982年7月25日発行 K K 晶文社

(福岡県立三池高等学校教諭)